

近代日本における青年の自我構造に関する試論

——明治後期青年像の方法論的位置付け——

加 藤 潤

An Essay on the Conceptual Transition of Youth in the Course of Japanese Modernization.

——An Methodological Perspective for the New Type of Young Men Emerged in Late Meiji Era, after 1905——

Jun KATO

1. はじめに

本論の目的は、これまで、心理学、社会学、歴史学等の様々な領域で研究対象とされてきた[青年期]の心理的特徴、行動様式が、青年を取り巻く社会状況との相互作用の中でいかなる位相を呈するのかを検討するものである。ここでは、青年期研究へのアプローチを整理し、さらに具体的検討の端緒として、明治後期の青年像に関する試考を提示するつもりである。そのことは、日本の近代化過程において、[青年の自我]もしくは[青年期]そのものについての概念¹⁾がいつどのようにして成立していったのかを探るためのひとつのステップになると考える。

2. 方法論的検討

青年期を分析対象として取り上げる際、分析者が依拠する理論的枠組いかんによってこれまで様々な定義、アプローチが取られてきた²⁾。したがって、当然そこから引き出される知見も累積的なものとは言えない。そこで、本研究の視座を明らかにするために、それらを便宜上3つに分類してみた。

1. 心理学的方法：発達段階的定義による青年期の心理特徴を解明 (Hall, 1904. Erikson, 1959)。
2. 社会学的方法：社会変動と青年の行動様式、価値観との関連を検証。下位文化としての若者文化の類型を抽出 (丸山, 1968. 松原, 1974. Parsons, 1964)。
3. 歴史学的方法：近代化以前の共同体における若者集団の民族誌とその社会統制機能分析 (中山, 1930. 平山, 1978)。

それぞれにもう少し詳しい説明を加えておこう。まず、心理学的方法では、人間のライフ・サイクルを漸生的 (epigenetic) にとらえ、青年期とは飽くまで発達段階におけるひとつのステージであり、そこを個人が通過する際に発現する心理的特徴によって他のステージと区別されるのである。また、社会学的方法では、青年期を近代化もしくは産業化にともなって発生した新たなライフ・ステージ (モラトリアム期=役割実験期) としてとらえ、社会構造と青年の心

理構造、行動様式との相互作用に着目した。一方、歴史学的方法の対象となってきた青年は、ムラにおける〔若者連〕または〔若者衆〕とよばれる集団であり、分析はそこに存在する若者文化(習俗)を、通過儀礼もしくは共同体の統制機能としてとらえたものである。さらに、青年の政治的社会化との関連で、若者集団が制度化される過程が明らかにされてきた(青年集団史研究)。

しかしながら、実際にはこれらの枠組の折衷的アプローチがなされており、本研究で注目したいのもそこである。例えば、エリクソンが展開したアイデンティティ概念では、人間の対的存在(社会的存在)が重視され、青年の主体的な価値選択と社会的役割取得が青年期の課題(identityの確立)とされているが、これは個人と社会という二つの変数を含んだ分析概念といえる。なかでも彼が行った心理歴史的方法(psycho-historical analysis)では、個人史資料を綿密に遡追することにより、その個人の青年期におけるアイデンティティ確立過程または拡散の状況が解明されている。しかし、この方法にはある限定が付きまとう。というのは、彼の方法が基本的には精神分析に依っていることから、その視野は内面的な心理状態にあり、個人を取り巻く社会状況と個人との葛藤を十分に浮彫りにしているとは言えないからである。先にも述べたように、本研究の焦点は社会変動の過程で青年の自我がどのように変化していったのかを、個人の内面レベルと社会的合意レベルの双方から検討することにあることから、我々は社会構造と価値状況に対してより大きな比重を置くべきだろう。そこで取り上げたいのが、近年の社会史研究によるアプローチである。例えば、ギリス(1985)は、若者文化についての歴史的叙述を、社会階層間の葛藤、中産階級がもつエートスの反映として捉え直した。彼によれば、〔青年期の発見〕さえ、国家および社会による統制を目的としたイデオロギーを含んだ運動であったことになる。つまり、階級という概念が構造機能的に発生したのではなく、すぐれて歴史的な産物であるというのが彼の立っている理論的枠組³⁾であり、青年期も同様の概念であると考えているのである。

以上のようなアプローチを要約すれば、すなわち、青年期概念の分析には社会集団が共有する観念もしくは合意といったマクロなレベルと、個人の内面世界というミクロなレベルがあり、そのどちらもが、〔社会的事実〕なのである。本研究でも、この複眼的視野のなかに、歴史的に自明視されている事実、概念を投入することによって、新たな日常世界の再構成を試みてみたい。

3. 明治後期における青年像の位置付け。

これまで述べたように、本研究は日本の近代過程における青年の心理と社会状況との相互作用について包括的に分析することを目的としているが、その端緒として、日本の近代における一つの思想的位相転換期として捉えられている明治後期に焦点を当ててみたい。これまでこの時期の青年についての分析は、おもに社会学における近代化研究と歴史研究の領域で行われてきた。例えば、丸山(1968)は日露戦争後に見られるインテリ青年を中心とした個人の析パターンを「私化」または「原子化」として変数化し、日本の近代化過程を個人の心理レベルで図式化した。また、橋川(1984)は同じ時期の「青年層のアノミックな自己喪失感⁴⁾」を、青年心理に生まれた「亀裂(シズム)⁵⁾」と名付け、このことが当時の為政者をして国家統合の危機的状況という認識に至らしめたという仮説を提示している。同じ状況を、明治維新以降の「乱世的立身出世の機会とはざされ⁶⁾」それに伴って青年心理が国家から遊離していった時期と捉えれば、日本の近代化にとまなう価値構造の転向点とマクロに分析することもできる(見田, 1971. 竹内,

1978)。さらに、心理学的分析に目を転じてみると、明治期の特定の人物についての伝記または日記の分析が散見できるが、これらは青年期の心理的特徴をパーソナル・ヒストリーのなかで検証しようという試みである⁷⁾ (西平, 1983, 竹内護夫, 1977)。

しかし、ここで2つの点について問い直してみたい。一つは、ここで「私化」という分析概念または「亀裂」という多分に文学的な言葉で置き換えられている明治後期の煩悶青年の心理構造が具体的にはどのようなものであったのかが、十分な資料によって後付けられていないままに使われていることである。また、いまひとつには、個人を取り巻く外部変数である時代状況が、政府の危機意識に偏って語られていることから、当時の社会(前世代層と考えてよい)がどのような青年像を抱いていたのかがリアルに再現されているかどうかという点についてはさらに検討する必要があるということである。

そこで本研究では、当時、ジャーナリズムの間で流行語のようにつかわれていた、煩悶、自我の覚醒、自覚といった言葉が、いったいどのような青年像をもとにしたのかを検討する。そのことは、いま我々が、アイデンティティの確立・拡散といった概念で置き換えている青年期の課題が、歴史的にどのようにして発生した概念またはイデオロギーであるのかを検討することになるのである。さらに言えば、この時期の青年をもって、近代的な概念としての青年期の発見といえるのか、そのことを検証することにもなる。

とはいえ、この時期の青年の行動様式を分析的に記述した文献は少ない⁸⁾。多くは、[青年の修養⁹⁾]という言葉で代表されるように、啓発を目的とした出版物と、マスコミによる若者文化退廃論である。しかし、本論で取り上げる伊藤銀月著『明治青年思想変遷史』(大正1年刊)は、前記のような限界を持ちながらも、明治期の青年像を時系列的に分類しようという志向を持ったものとして評価したい。以下では、同書を手掛かりとして、当時の青年像にアプローチしていきたい。

4. 通時的概観

まず、当時の青年を分析的にしる日常感覚的にしる、外から観察していた明治の知識人たちは、明治期全体を通じての青年像の変化をどのように捉えていたのだろうか、その点を探るために、先に挙げた『明治青年思想変遷史』を抄説しておきたい。

著者伊藤は、明治期を単線的な発展の過程とは考えず、少なくとも価値状況については、異質なものと伝統的なものとの葛藤の中で人々の志向が両者を往復する過程(「求心遠心両様の作用¹⁰⁾」)として理解していると思われる。そして、青年の価値観はそうした時代状況に呼応し、時には時代の嚆矢を切る形で往復運動を展開し、それが具体的行為として、政治、風俗などさまざまな領域で発現していくのである。彼は明治期を大きく4つの思想的時代区分に分けている。それを簡単に概説すれば次のようなものになる。

1 [自我解放期]：この時期の青年知識人たちの多くは自由民権運動の担い手となり、「新文明の内容たる新思想を取って、之れを青年子弟の頭脳に吹き込む¹¹⁾」という役割を果たした。具体的には、彼らの行動は、雑誌・新聞による世論形成活動と結社・教育機関の設立による啓発、教育活動(慶応義塾、同人社等の洋学塾の設立)であった。

2 [没自我的欧化期]：「政府側に己等(自由民権論者：筆者)より一步進めたる西洋模倣の態度にでられ¹²⁾」、反政府運動は「民権自由を呼号するの必要、自然に薄らぎ¹³⁾」、次第に拡散していったのである。

3 [反抗期]: 「欧化せしむとも、其欧化の度に従って、益々自我的意識の濃厚なるを致さしむべしとの主義¹⁴⁾」が台頭し、明治 21 年に組織された政教社が「国粹主義を執る青年の根拠として、全国に同系統の青年を作りつつ¹⁵⁾」あった。また古文学復興の動きなども同じ流れのなかで理解できる。

4 [自我解放期] すでに「愛国主義復興の時期の底に、その反動としての、自我の覚醒、個性の欲求が、一条の暗流を作りつつ動揺しはじめ¹⁶⁾」、日露戦争以後、青年の心理に変化が見え始めた。それは、A から B へという単純な図式ではなく、「複雑なる心理作用¹⁷⁾」になって現れた。その複雑なる心理は次のような 2 つの行動様式または価値観の変化となって表面化した。

イ) [自我の覚醒]: 「団体的自我¹⁸⁾」ではなく「個人的自我¹⁹⁾」の定義と意味づけを模索する煩悶青年の出現。その一方で、「肉的自我²⁰⁾」の解放を覚醒とする傾向も生まれた(自然主義文学、恋愛ブーム)。

ロ) [個性の欲求]: 「目的のためには手段を選ばず²¹⁾」、「金銭を得ることを目的²²⁾」とした成功ブーム。

こうした彼の整理は基本的には、[脱亜入欧論] から [亜細亜主義] への政治思想変化として図式化されている現在の知見と共有されるものであろう。ただ、指摘しておきたいのは、1～3 までの思想変遷は、政治または世論の動向のなかに包摂されるものであり、青年心理の位相変化というより、自己を時代という外的価値にコミットさせる伝統的なタイプと連続性をもっているといえる。この点では、彼は時代状況と青年の心理状況を混同して使用しているとも言える。従って、ここで彼が使っている [自我] というタームを、その概念を注意深く検討することなく今われわれが持つ分析概念と同等に扱うことは危険である。むしろ、[自我] という概念が青年の心理構造を説明する概念としてこの時期に芽生え、徐々に明確になっていく過程を追っていくことこそが重要であろう。

5. [自我] という概念.

先にも述べたように、この時期の文献に使用されている [自我] という言葉は前掲書に限らず、定義のなされない曖昧性をもっている。しかし、それゆえにここで使用されている [自我] なる言葉の含意するものが、すなわち彼らが日常世界の中で解釈した近代の青年の特徴であるといえよう。それについての厳密な検討は今後の研究に譲らなければならないが、ここでは、『明治青年思想変遷史』で使われている [自我] という単語の性質について 2 つのことを指摘しておきたい。まず一つには、日露戦争以前の記述の中に使われている [自我] という言葉は、日本人としての独自性(または自覚)といった意味であり、いわゆるナショナル・アイデンティティに近いものであるという点を指摘しておきたい。それは、たとえば明治中期ををして [没自我的欧化] とする使い方や、反動期が「日本人が始(ママ)めて個人的自覚を為し来れる²³⁾」時期と説明されているが、ここで言う [自我] とは、欧化と伝統的エートスとが交錯するなかでなんとか確立しようとしている、集団としての日本人の同一性のことである。ところが、日露戦争以後、[自我] という言葉があらためて [個人的自我] と [団体的自我] という 2 種類の言葉に使い分けられていることから、明らかに [個] と [社会] または [国家] とが概念的に対置されて考えられていると思われる。このことは [個] と [国家] とが必ずしも常に同一の価値を共有するものではない状況が実際に生まれ始めていることを語っているとも言える²⁴⁾。とはいえ、われわれが定義するような、様々な役割実験のなかから主体的に自己を選択し、そ

とはいえ、われわれが定義するような、様々な役割実験のなかから主体的に自己を選択し、それを所属する社会・文化によって認知されることにより、個と社会を統合するという青年期の定義(アイデンティティ概念)とは隔たりがある。というのは、明治後期の青年がもつめる自我とは、[私のものとしての成功もしくは恋愛]であり、それは飽くまで、自然主義が日本的な系譜をたどったことにみられるように、欲望の解放という意味での近代的な個の出現にとどまるからである。だが、この時期の[自我]の概念の変化を綿密に後付ける作業はこれまでの政治思想史の研究のなかでも十分とは言えず、いわゆる「個の出現」(岡, 1967. 参照)を明治後期に求めるためにはさらに検討が必要であろう。

6. 知識人たちの青年観

これまで述べてきたことをさらに一般的な議論に敷衍する手がかりとして、明治44年に行われたひとつのアンケート結果を見てみたい(その結果は、『青年修養問題』明治41年、集文館刊として出版されている)。このアンケートとは当時の文壇および論壇から40人を選び、彼らの理解する当時の青年について5項目に答えるという、当時よく行われた方法であった。このアンケート自体はなんら分析枠組みをもつものではないことは言うまでもないが、当時の知識人がもっていた青年観の共通部分がある程度あきらかにしてくれる。ここでは、5つの項目のう

表1 知識人たちの青年観

助くべき青年の長所	改むべき短所
<ul style="list-style-type: none"> ・ボンヤリとして太平楽、伶俐、機敏 ・目に見えるものより目にみえぬものを重んずる ・現実に向かって進むということよりも、むしろ、思索に馳駢していくという風 ・自分の短所、長所を知る自覚の精神 ・自家意識の觀念に長せる事 ・世界的、秩序的、自己を知る(反省克己) ・自己意識の猛盛なること ・精神的根拠の動揺=煩悶→内部的精神的野心 ・趣味が広くなる ・音楽とか美術とかいう我々の青年時代には知らなかった物を今の青年はいくらか知っている ・思想の深刻 ・自分自身に何となく不安を感じている→<u>靈的喝仰</u>→<u>向上心</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・小成、老成、日和見、人に良く見られんとする。 ・労少なくして報酬多き業務を得んとする ・薄志弱行、センチメンタルなること。 ・空英雄を気取り、疎豪磊落を装うた書生風はほとんど影を絶った。 ・空想を抱き過ぎ。 ・時代精神が旺盛であるのに各自の意志が薄弱。 ・早く家庭をつくって夫婦安居。 ・早く世帯じみている。 ・余りに多角多樣的に流るる。 ・金銭的地位、名譽、事業などの手段を目的となす。 ・気概に乏しきこと。 ・自発的に事をなさず、一寸当たらしき説起できれば直ちに雷同的にそれに従う。 ・生存競争の激しくなった影響で、<u>世故にたけている</u>。 ・受け売り、焼き直して創造することができない。運動熱、恋愛中心の人生観。

出所：『青年修養問題』，集文館，明治41年より作成。

注)：傍線，矢印は筆者。

ち、1)「現時の青年に助くべく長所」について、2)「現時の青年に改むるべき短所及其の救済」についての二つの質問に対する解答から主なものを抽出してみたい。しかし、アンケート自体が自由筆記形式のものであり、筆者にも現段階で枠組みがあるわけではなく、かなり恣意的なものであることは断っておかなければならない。

さて、表1はその結果を網羅的に挙げたものである。まず概観してみると、ここには、これまで言われてきたように、国家から遊離して、物質的成功を求める青年や私的な世界に閉じこもり勝ちで文弱な煩悶青年が浮き上がってくる。がしかし、注意しなければならないのは、[成功青年]や[煩悶青年]の特徴が必ずしも短所としてのみでなく、「社会進歩のあらわれ²⁵⁾」として肯定的にも捉えられていることである。たとえば、「世故に長け²⁶⁾」ており、「一足とびに成功しようとする²⁷⁾」青年の短所は、別の見方をすれば、よく「自己を知り²⁸⁾」、如才なく、眼前の利害にぬけめない合理的な青年とも映るのである。また、明治初期の書生風をうしない、恋愛、運動に熱中する、[消費的自我]とも言うべき享乐的傾向をもった青年は、別の回答者の弁を借りれば、前世代が味わったことのない広い趣味の世界をもち、それは「我が国の文化が皮相的で無くなった²⁹⁾」ことでもあった。さらに、哲学なんぞやると自殺すると恐れられた煩悶青年でさえ、「一箇人として自分自身に何となく不安を感じている³⁰⁾」ことが向上心、自己にたいする探究心を生み出すものとして肯定的にみる知識人も少なくない。したがって、日露戦争後における新しいタイプの青年を単なる違和感のみならず、一步進んで退廃的であり社会にとっての脅威として青年の修養を求める当時の社会風潮には、すでにある種の価値判断が含まれている可能性がある。この価値判断とは、明治後期を、近代化の目標が拡散し始め、社会統合に亀裂が生じた時期としてとらえ、政府による個人の国家の組込みという政策的意図を読みとることによって理解できよう(橋川、1983、参照)。

7. 新たなタイプの青年についての若干の試考

ひとつの世代はその前世代をモデルとし追体験するし、前世代は「後世代の新しい世代宣言」に対しては、たえずブレーキをかけ続け³¹⁾る。それによって、明治維新から日露戦争にいたるまで、世代間の価値伝達がなされてきた。しかし、明治後期になると、青年の「精神的内面性の領域は先頭者を追い越して深まり、もはやかれらに不可解となっていた³²⁾」。

確かに、日露戦争以後の青年心理には何らかの亀裂が生じ、それは国家への忠誠心の希薄化であり、目標を失ったアノミックな閉塞感でもあったのだが、さらに青年の行動レベルから言えば「私的世界の成立」ということになろう。だが、問題の所在はこうした青年層の私的世界への閉じこもり現象がどのような社会構造の変化によってもたらされたのかという点にある。ひとつの仮説として言えるのは、明治後期にいたって国家組織が基盤を固め、社会の制度化が進むことによって、青年の日常世界、さらには立身出世をも含めた自らのライフ・サイクルに対するパースペクティブが変化したのではないだろうかということである。つまり、見田(1971)も言うように、乱世的立身出世の時代は終わりを告げ、代わって教育階梯を一步一步登りつめるという学歴主義を媒体とする出世パターンが定着したということである。実際には、それさえも、学歴インフレの進行と高等教育の収容力の限界によって脅かされていたのだった。

また、明治初期のように国家が等身大にあり、ジャーナリズム、政治など何らかの形で国家建設に参画できる可能性が次第に遠退いていく時、野心家としての青年の気持ちは国家から遊離し、市民的なパースペクティブに変わっていったのではないだろうか。言い換えれば、国家

目標の喪失と競走の激化という社会状況の中で、「人々はおのがじし自己保存のために社会環境に個別的に働きかけなければならぬ³³⁾」になったのではないだろうか。そんな行動様式を持った青年は、前世代にとっては「冷悧で機敏³⁴⁾」かつ「反省克己³⁵⁾」(セルフ・コントロール)の利いたクールな人間像として映るのだろう。青年たちは「世直し³⁶⁾」という野心を捨てて、堅実で見通しのきく世帯じみた「世渡り³⁷⁾」へとライフ・スタイルを変えていったのである。

それでは、[成功]という明確な目標にむかって術を選ばない青年たちはどのような背景から生まれてきたのだろうか。この点についての説得力ある説明は、当時の詳細な事実検討をまたなければならぬが、ひとつの説明枠組みとして、[成功]が自己を滅却したうえで、「新時代招来の犠牲となる³⁸⁾」ことから、世俗的、個人的なものへと入れ替わり、結果としての物質的成功(拝金主義)が強調されるあまり、「目標達成の仕方や手段を律する制度的規範を内面化できな³⁹⁾」(マートン, 1961)になっていたと考えることができる。R. K. マートンは、個人がこうした社会への適応様式をしめすとき、「富と権力を得るために、効果は多いが制度的には禁止されている手段を用いる⁴⁰⁾」と述べている。その反面で、引き延ばされた普通学校教育の中で、小市民的なパースペクティブも持てず、かといって世俗的成功に価値を見いだすことも潔よしとしない煩悶青年たちは、文学、恋愛、趣味といった、大人たちには「婦女子的⁴¹⁾」とも思える世界に逼塞していったのであった。それでも追求すべき価値を社会にもとめれば、結局はアノミックな時代閉塞感にとらわれることになる。

これまで述べてきた若干の試考は、飽くまで今後の検証への布石であり、その妥当性をここで云々できない。ただ言えるのは、明治後期に現れた[私的]な[消費的自我]をもった青年は、政府がいただいていた危機感(たとえば戊申詔書)に見られるほど否定的なものとして一般に受け取られていたわけではなかったということである。しかし、これら青年は大人たちにとっては「異質な世代」に映ったことは確かである。それゆえに、ある意味ではモラトリアムに相当する期間を与えられ、その中で自ら何者になろうとして価値を模索する青年たちを、人生における正当なステップを踏んでいると見なすには至っていなかったのである。

残された課題

最後に、いま緒についたばかりの本研究にとっての次の課題を述べておきたい。ここで明らかにしようとしたのは、おもに知識人に代表される「大人」たちが、対象としての青年についてどのような認識をしていたのかということである。これも確かに明治後期の青年のひとつの社会的断面には違いないが、それとともに、青年の自己意識をさぐる作業を進めなければならない。なぜなら、青年の行動様式または青年文化に対して政策者や上の世代がどのような理解をし、価値判断を下したかということと、青年自身の意識世界におけるリアリティーとは当然ズレが生じるはずであるからである。本研究は近代日本における青年期概念の成立に焦点を当てているわけであるから、これら2つの視点が常に照合されなければならないだろう。

まず、当面の課題として、青年の意識をさぐる一次的資料を検討しなければならない。これまで、多くの先行研究が、作家の日記、自叙伝をドキュメントとして使用しているが、本研究ではそれと同時に旧制高等学校及び中学校の校友会誌を通読することで、学生文化さらには彼らの価値観、葛藤状況へと深めることができると考えている。これについての報告は次の機会に譲ることにしたい。

参考文献目録

(欧文)

- 1) Aries, P, Centuries of Childhood-A Social History of Family Life, Vintage Books, 1962.
- 2) Erikson, E, Identity and the Life Cycle, International University Press, 1959.
- 3) Gillis, J. "Conformity and Rebellion Contrasting Style of English and German Youth, 1900-33", Histroy of Education Quartely, Vol. 13 (Fall, 1973).
- 4) Hall, S, Adolescence; Its Psychology, Its Relations to Physiology, Anthropology, Sex, Crim, Religion, and Education, Vol. 1, New York, 1904, Vol. 2, 2d ed, New York, 1969.
- 5) Hogan, J, Class and Reform, Shool and Society in Chicago, 1880-1930, Univ. of Pennsylvania Press, 1985.
- 6) Kett, J, Rite and Passage; Adolescence in America, 1790 to the Present, New York, Basic Book.
- 7) Parsons, T, Social Structure and Personality, Free Press of Glencoe, 1964.
- 8) Thompson, E, The Making of the English Working Class, Panthen Book, 1958.

(邦文：戦前のもものは元号を使用)

- 1) アリエス著, 杉山光信他訳『〈子供〉の誕生——アンシャンレジーム期の子供と家庭生活——』みすず書房, 1980年.
- 2) 伊藤銀月『明治青年思想変遷史』前川文栄閣, 大正1年.
- 3) エリクソン著, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ』金沢文庫, 1973年.
- 4) 岡義武「日露戦争吾における新しい世代の成長」(上・下), 『思想』1967年, 2月号および3月号, 岩波書店.
- 5) 岡和田常忠「青年論と世代論——明治期におけるその政治的特質——」, 『思想』1967年, 4月号, 岩波書店.
- 6) 神島二郎「社会の発見」, 橋川文三他編『近代日本政治思想史1』有斐閣, 1971年, 第4部.
- 7) ギリス著, 北本正章訳『若者の社会史』新曜社, 1985年.
- 8) 栗原彬『やさしさのゆくえ=現代青年論』筑摩書房, 1981年.
- 9) 高橋淡水『青年学生史』真文社, 大正7年.
- 10) 竹山護夫「歴史に見る十八歳の青春」, 『青年心理』第14号, 1977年.
- 11) 竹内洋『日本人の出世観』学文社, 1978年.
- 21) 中山太郎『日本若者史』春陽堂, 昭和5年.
- 13) 平山和彦『青年集団史研究序説』(上・下), 新泉社, 1978年.
- 14) 西平直喜『青年心理学方法論』有斐閣, 1983年.
- 15) 橋川文三『昭和維新試論』朝日新聞社, 1984年.
- 16) マートン著, 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961年.
- 17) 丸山真男「個人析出のさまざまなパターン近代日本をケースとして」, ジャンセン編, 細谷千博編訳『日本における近代化の問題』岩波書店, 1968年.
- 18) 松原治郎『日本青年の意識構造』弘文堂, 1974年.
- 19) 見田宗介『現代日本の精神構造』弘文堂, 1966年.
- 20) 吉野作造「日本学生運動史」, 岩波講座『教育科学』第15巻, 岩波書店, 昭和7年.
- 21) 『青年修養問題』集文館, 明治41年.

注

- 1) いうまでもなく、〈青年期〉という概念が人間の発達段階の一つというより、近代のある時期にある階層の人々によって発見されたものであるという考え方は、〈子供期〉の発見を実証してみせた社会史研究の

近代日本における青年の自我構造に関する試論

先駆者である Aries (1962)に依るところが大きい。

また、我が国の研究者でも、例えば中川 (1959) は青年期の発見が「歴史的にみてそうふいことではなく、「大人の社会から閉めだされたまま、何年かを送るといような、人生の「特殊」な時期」が発生したのは、資本主義の発達にともなうものであることを早くから指摘している (中川作一『青年心理学』法政大学出版局、1959年、pp. 71-72.参照)。

- 2) 青年期についての研究動向をコンパクトに整理しているものとしては、松原治郎・岡本哲雄編『青年—現代的状況』現代のエスプリ別冊1、至文堂、1977年。
- 3) ギリスが取った理論的枠組には、Tompson (1958)のような歴史学的視野のみならず、例えば、社会統制理論 (social control theory) といった社会学的枠組も含まれていると思われる。従って、教育改革運動に特定の階層による政治的意図を読み取ることで教育史を書き換えたリビジョニストと言われる研究者の流れも汲んでいると考えられる。しかし、社会学的概念である、階級、地位、威信といったカテゴリー概念を廃し、ある社会構造をアプリアリなものとなすのではなく、人間の諸関係において起きる歴史的出来事 (historical event) と捉える、言わば社会史研究の原点に立ち返ってみるアプローチが近年出てきていることは方法論に見ても注目し価値するだろう (Hogan, 1985.参照)。
- 4) 橋川文三『昭和維新試論』朝日新聞社、1984年、P. 105.
- 5) 同上書、pp. 71-81.
- 6) 見田宗介『現代日本の心情と論理』筑摩書房、1971年、P. 191. 見田はここで、閉ざされた機会という現状に対する青年層の閉塞感を慰撫するため、「オピニオンリーダーたちは、少年たちがいたずらに志のみを高うすることをいましめ、ステップ・バイ・ステップの着実な努力をもつばら強調しはじめる」と述べ (同上)、報徳運動さらには地方改良運動へといった政策側の社会統制の強化を中心に記述しているが、本論では、飽くまで政策に先立つ社会状況に焦点を当てる。
- 7) 伝記分析的方法について、西平 (1983) は、対象とする「個人の自我同一性は、青年期にどのように混乱し拡散したか、どのように安定と確立に向かったか」という点を明らかにすることを課題としている (西平, 1983, pp. 190-191.)。
- 8) 「青年論そのものへの対象的自覚による「青年論」の成立は1930年代をまたなければならない」(岡和田, 1967, P. 37)。
- 9) このことを表す一つの指標として、国会図書館蔵の明治期に発刊された青年関係文献を検索してみた。その中から、青年の [修養], [自覚] といった内容の文献を精選してみると、総数で33冊にのぼった。その内訳を時系的に示すと次のようになる。

年代	10-20年	21-30年	31-40年	41-45年	合計
修養	0	3	13	17	33

注：[修養] は、修養、処世、青年訓などの言葉をタイトルに含むものをピックアップした

これからも分かるように、明治30年以後にこの類の出版物が集中している。とくに、修養という名を冠した書となると、この中では占部百太郎『青年の修養』内外出版協会、明治39年が最初であり、以後40年代にかけて、自覚をタイトルとしたものも含めて続出するようになる。

- 10) 伊藤銀月『明治青年思想変遷史』前川文栄閣、大正1年、P. 124. および、P. 177.
- 11) 同上、pp. 42-43.
- 12) 同上、P. 81.
- 13) 同上、P. 81.
- 14) 同上、P. 84.
- 15) 同上、P. 87.
- 16) 同上、P. 126.
- 17) 同上、pp. 148-151.

- 18) 同上, P. 162.
- 19) 同上, P. 162.
- 20) 同上, pp. 162-163.
- 21) 同上, P. 153.
- 22) 同上, P. 155.
- 23) 同上, P. 90.
- 24) たとえば, 大町桂月『青年時代』大倉書店, 明治41年, P. 107, を見よ.
- 25) 『青年修養問題』集文社, 明治41年, P. 25.
- 26) 同上, P. 149.
- 27) 同上, P. 146.
- 28) 同上, P. 36.
- 29) 同上, P. 149.
- 30) 同上, P. 159. また, こう言う論者もいる。「自分の立ち場どころか, 他人の立場さえも区別がつかなくなってしまふ。つまり, 精神の依り所にまよふのだ。この迷いが煩悶苦悶となって, 之れが解決を得ないとしても内部的精神的野心となって, 顕われる」(同上, P. 108.)
- 31) 岡和田常忠「青年論と世代論——明治期におけるその政治的特質——」『思想』1967年, 4月号, 岩波書店, P. 54.
- 32) 同上, P. 56.
- 33) 神島二郎「社会の発見」, 橋川文三他編『近代日本政治思想史1』有斐閣, 1971年, 第4部, 所収, P. 394.
- 34) 『青年修養問題』前掲, P. 25.
- 35) 同上, P. 50.
- 36) 神島二郎, 前掲書, P. 394.
- 37) 同上, P. 394.
- 38) 『明治青年思想変遷史』P. 50.
- 39) R. K. マートン著, 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961年, P. 131.
- 40) 同上, P. 131.
- 41) 『青年修養問題』前掲, P. 131. また, 「早くから自分の社会的地位を得たいと一足飛に立身せんなどの考をもって」(同前, P. 131)おり, 「早く家庭をつくって夫婦安居して何とかいうようなこと」(同前, P. 68)を考えている, そんな私生活志向の青年像が大人たちの目に映ったのであろう.

Bulletin of Nagoya women's University, 1988, Vol. 35.

An Essay on the Conceptual Transition of Youth in the Course of Japanese Modernization.
—An Methodological Perspective for the New Type of Young Men Emerged
in Late Meiji Era, after 1905—

Jun KATO

abstract

This paper firstly presents a methodological survey over the series of studies on the youth as the concept historically discovered in the course of Japanese modernization. The concept of Youth or Adolescence, formally recognized only as one of the stages of epigenetic development, recently has been re-examined in the context of historical event or social control. The analysis here is also based on such a methodological revision.

Secondly for the specification of our analysis, we focus on the Modern Japanese Youth which was perceived as an "Alien Generation" to the preceding one. Using the data such as descriptive poll or publication dealing with the disparity between two generations, we find clear turningpoint of value structure of young men in parallel with the change of Japanese social structure around the 1905, the year of the Japanese-Russian War was over.

Our findings here are as follows. 1)The society found the concept of selfness in the psychological status of young men around the twentieth century. But instead of sharing the concept of identity crisis among young men, people labeled them as morally corrupted generation. 2)Such a situation can be accounted by the transition of the social goal from the nation oriented one to the private life oriented one. 3)This social situation gave rise to two types of young men, one was enthusiastic for own success and consumatory life style, and the other was gloomy in the identity diffusion and vacancy of any goal or value to commit themselves.

But more detailed first hand data should be collected and examined before we come to conclusion. At the same time, we should examine how the social fact of market revolution and the extension of schooling affect the life cycle of young men and their internal status.